

「取っ組み合い」をする  
喜び

——入不二さんは哲学の教授でありながら、五十一歳からレスリングを始められました。一方の今井さんは、子どもがいかに言語を獲得していくか、認知科学の観点から研究を進めてこられました。今日は言語のプロフェッショナルのお二人に、「学び」について身体との関連を踏まえながら対談していただきたいと思えます。入不二 私は五十一歳から、しかも運動部の経験ゼロにもかかわらずレスリングを始めたので、周りの方からよく驚かれます(笑)。確かにフィジカルの強さがものをいうレスリングは、多くの人が小学校前から、遅くとも高校から始めるケースがほとんど。社会人クラスの門を叩いた時、ほかの会員は経験者が多くて、



レスリングの試合をする入不二さん (写真提供◎入不二さん)

私は珍しがられました。しかし、哲学という抽象度の高い思考の極北を追究してきた私にとって、レスリングという原始的な格闘技は、ある意味で極南のスポーツとも言えて、思考の極端から身体の極端への振り戻しなのだと感じています。

今井 レスリングに挑む入不二さんの動画がウェブに上がっていたので拝見したのですけれど、素敵でした。私もスポーツジムには行くのですが、それは体力維持のためで、正直なところ渋々(笑)。行ってしまえば楽しいものの、行くまでが億劫なのです。入不二さんはレスリングを七年も続けていますから、意志が強いのでしょうかね。

入不二 昔から格闘技を観ることは好きでした。そこに息子が始めたキックボクシングがきっかけとなり、私の潜在的な欲求に火が付いたのだと思います。でも、「意志が強い」わけではなくて、ただ自分の欲望に素直に従っていたら、こうなったというだけの気がします。レスリングをやってみて気づいたことは、シンブルな格闘競技ゆえ、素の肉体の能力が試される場面に直面せざるをえ



青山学院大学教授

## 入不二基義

いりふじもとよし

1958年生まれ。東京大学大学院博士課程単位取得。専攻は哲学。主に自我論・相対主義論・時間論を研究。著書に『時間は実在するか』『相対主義の極北』『あるようにあり、なるようになる 運命論の運命』など。

## 対談

レスラー哲学者と注目の認知科学者が教える

# 身体から考える本物の「学び方」



慶應義塾大学教授

## 今井むつみ

いまいむつみ

1989年慶應義塾大学大学院博士課程単位取得退学。94年ノースウェスタン大学心理学部Ph.D.取得。専攻は認知科学、言語心理学。著書に『ことばと思考』『言語と身体性』(編著)、『学びとは何か』など。



ないということですが。他方、食欲、性欲、睡眠欲に並んで、「取っ組み合い欲」とでも呼びたい欲求があることにも気づかされました。私が子どもの頃など、遊びの中でよく取っ組み合いをしたのですが、当時の身体接触の記憶、私の中の古層が呼び戻されて、組み合う喜びを感じます。

**今井** 社会人チームのほかに、勤務先の青山学院大学のレスリング部でも練習をなさっているのですよね。やっぱり学生さんたちは強いのでしょうか。

**入不二** 青学のレスリング部は東日本学生リーグ戦で一部リーグですし、スポーツ推薦で入ってくるその道のエリートばかりですから、かなり強いんです。それと比べたら私など赤子のようなもので、彼らもそこに配慮しながら練習相手をしてくれます。

への「反動か？」という問いですが、私は、むしろ両者の根っこは同じだと考えています。まず、運動志向ですが、その根っこには、老いない身体への、究極的には不老不死への欲望があります。歳をとっても若いままにいたい、死にたくないという人々の欲望は、美容や健康食品、運動など、様々な形を取ります。そしてIT・情報化も、同じ不死への欲望によって駆動されています。記憶を外部的化することもそうですし、「1」と「0」の並びに基づく情報は永遠に滅びないもののようにも見えます。世界の情報を全て集約して保存したいという情報への偏愛は、人間の「不死」への欲望の現代版です。問いは、「反動か？」と訊いていますが、どちらも不老不死や永遠性を希求する願望に基づき、同じ方向を向いています。反動と捉えてしま

また、学生から教えてもらうことで、自分を普段とは逆のモードに置くことができるので、とても新鮮です。「教えるー教わる」の切り替えは上手いほうだと思います。もし私に強みがあるとすれば、やはり哲学を通して抽象的なことを考え、言葉にしてきた経験でしょう。体の動きや技を学ぶ過程で、それまでレスラーたちが言語化してこなかったことや、気づかなかったことを私が言葉にする、面白がられます(笑)。反対に私は俯瞰して言語化するクセがあるので、闘いに没入できず、試合でも戦闘モードになりきれないのは決定的な弱みです。

### 運動志向は 不老不死への欲望

——ここ一〇年でランニング人口が増え、スポーツジムに通うことも日々と、その根っこの共通部分を見えにくくして、隠してしまいうだろうと思います。

ITの最先端であるカリフォルニアで流行った瞑想(マインドフルネス)が、逆輸入されるように日本にも入ってきて、広まっているようです。これも、ITとスピリチュアルなもの、反動的どころか、むしろ相性がよく、同じ心性に基づいていることを示唆しています。ITとスポーツ産業も、むしろ一体化しているのではないのでしょうか。

——なるほど、運動志向とIT化は同じ欲望のもとにあると。健康や身体を特集する雑誌やテレビ番組が増加傾向にあることも、IT化の進行と比例していると考えれば納得です。身体を知ることがこれからの教養になるのでしょうか。

**今井** インドの古い医学に「アーユ

常的になったと感じます。これは社会がIT化・記号化していること、反動にも思えるのですが、それにいつてどのようにお考えですか。

**今井** 言語と身体の関係については後ほどお話ししたいのですが、記号化と身体とは対立する概念ではないと思います。ジムに通っていても、特に年配の女性たちが熱心なように思います。彼女たちは決してITに毒され、記号化された世界に疲れてそれを癒やしに来ているわけではないでしょう。それとは関係なく人に会いに行くこと、コミュニケーションを楽しみに行っているのだと思います。もう一つは、昨日できなかった運動が今日できた、昨日より長く走れたという達成感。自分が階段を一つずつ上っていることに喜びを感じているのだと思います。

**入不二** 「運動志向はIT・情報化

ルヴェーダ」がありますが、これは生命そのものを科学する医学、実践的な健康法です。つまり古代から身体は教養として大事にされてきたのではないのでしょうか。あえて現代に必要な「身体についての教養」を考えるなら、「情報過多」の問題への対処という意味で、身体に関して知識を持つことが重要なのではないのでしょうか。本もテレビもインターネットもあって、身体の不調や病気について調べれば、山のように情報が得られる。しかし、Aがいいという情報が一方で、まったく逆のBがいいという情報もあって、合理的には判別したい時がある。それでもどちらかを選択しなければならぬ時、最終的には「直観」に頼るしかありません。この時の直観こそが「身体性」なのだと思えます。

人の日常の推論はほとんどの場合、

自分が経験した、あるいは教えられた事例を一般化することで行います。

これは帰納推論です。例えば子どもが「リンゴ」という言葉を習得していく過程でも、「リンゴ」という音の連なりと目の前のリンゴを結びつけ、それを一般化することで「リンゴ」という語の意味を理解する。しかしその時、個別の語と一つの対象の結びつきを単に記憶するのではなく、そのように言葉を学習する経験を積み重ねる中で、やがてモノの名前の一般化には色や大きさではなくて、形の類似性が大事だという洞察を得て、それを知識として未知の語の推論に使い、急速に語彙を拡大させていきます。つまり帰納推論による一般化は知識によって制約されなければ役に立たない。しかしどの知識が役に立つかはだれも教えてくれない。帰納推論を正しく制約させる

うるのではないのでしょうか。

ところで私は、レスリングの経験も踏まえて、「生きられた身体」では不十分だと考えています。「生きられた身体」は、両義的ではあって結局一人称的で、自分が内側から自分の身体を生きる話です。その身

ためには適切に仮説を立てる「アブダクション推論」が必要なのです。

そしてアブダクションは直観とも深く結びついています。経験から導出した様々な知識のどれが、今直面する問題に使えるのか。その直観はまさにアブダクション推論です。ちなみに、子どもにどのような学習をさせるべきか。世界の認知科学の研究は、日本の大学入試のように知識量や、公式を使って計算できるかを測るものではなく、「いかに『思考の仕方』を身につけさせるか」という方向性で進んでいます。ここでは仮説の立て方や、データの検証の仕方などの、いわば「分析的思考」を身につけることが重要視されています。しかし、分析的思考を磨くだけでは創造的思考はできません。創造的な仕事、特にAIができないような仕事をするには直観を磨かな

ければなりません。それにはアブダクション推論の仕方を磨く、つまり知識の使い方を学習しなければなら

ないのです。入不二 身体と教養ですが、哲学にも「身体論」という分野があり、二十世紀のフランスの哲学者メルロ・ポンティ等が代表的な論者です。それまでの哲学では、十七世紀のデカルト以来、「コギト（私は考える）」という自己意識のコアを、身体と切り離そうとする傾向がありました。ところがメルロ・ポンティは、「生きられた身体」という仕方でコギトを受肉化して、主体でもあり対象にもなる両義的なあり方を強調しました。身体論は一九三〇年頃からの哲学のブームでもありましたし、これからも研究は進むでしょう。日本にも心身一如的な伝統がありますし、身体論は、二十一世紀の教養になり



体は、「お行儀がよくて」暴走はしない。メルロ・ポンティも後期になると「(身体ならぬ)肉(Chair)」という次元が登場して面白いのですが、身体は安定した輪郭などをはみ出して、もっと暴走するものです。レスリングでは、ぐじゃぐじゃに組み合わせ

つて、子犬どうしのように絡み合うことが起こります。二つで一つのよ

うな身体運動が起こる。足を取られないように前傾姿勢になり、四つ足にも近づいていく。身体所作が動物的になる。言語を学ぶことで、ヒトは人間になっていくのですが、レスリングを通して、人間は哺乳類という古層を取り戻す。身体を通じて、生物の「種」を超える通路さえ開けていると思います。

もう一つは、相手の身体の実在感の大きさを知ること。大学生レスラーと組み合っていると、「身体自体が、人を殺せるほどの凶器である」ことを思い知らされます。これは相手との接触があつて初めて開ける世界です。古代ギリシアでは、レスリングとダンスは青年の必修科目だったようです。ダンスは「身体の調和の追求」で、レスリングは「身体



ていくようなイメージで学習していいのではないだろうか。

赤ちゃんが母語を習得する過程と、ある程度の年齢になって外国語を習得する過程には大きく異なる部分があります。赤ちゃんは、視覚、聴覚、触覚などの知覚経験と、運動によって得られた経験がアブダクション推論によって一般化・抽象化されて母語習得している。イメージとしては、外界をコピーするのではなく、外界の一部を切り取って、それを自分の中に取り込み、自分で分析して再構築していくプロセスです。個別の単語の意味を文脈情報から推論し、その経験から後の学習に役立つパターンを発見する。その知識を使って、さらに推論による学習を加速させ、語彙を膨らませ、語彙に関する知識（メタ知識）を精緻にしていく。その過程を繰り返すことで最終的には

言語全体の仕組みを理解します。

一方、外国語を習得する際には既に母語が帰納推論のベースになっているので、その概念に縛られがちです。例えば英語の「walk」は、日本語で「歩く」と暗記したはず。しかし「walk」には、散歩する、世を渡るなど、日本語の「歩く」が持たない意味もある。「歩く」と「walk」の関係に限らず、英語が日本語と一対一対応になっていないことを、多くの学習者は理解せず、英語を覚える時に、一見対応するように見える日本語の単語の意味の範囲を無意識に英単語の意味に当てはめてしまいうのです。

このように、母語は言葉を見出し、引き出しを作って、それを使い、間違っていたら修正して、そういう一連の思考のチェーン、身体性を伴った思考をすることで、「生きた知

識」になっていきます。一方、外国語は暗記主体で、知識をベタベタと表に貼り付けることで膨らませようとする。しかしそれは推論の一連のつながりになっていない。つまり知識が身体化されていないので、うまく使えません。もちろん外国語でも学習を重ねることで知識の断片を統合し、「生きた知識」にすることはできます。しかしそのためには暗記ではなく、推論の連鎖を経て、外国語と日本語との違いを理解し、外国語の仕組みを身体化することが必要となります。

入不二 そうですね、「言語」と「身体」は対立語ではない。むしろ言語は、身体性と脱身体性の接面であって、「拡張する身体」と言い換えることもできるでしょう。例えばメガネや義肢などがそうでしょうが、それらは肉体ではなくとも、い

反発・競合の持続」でしょう。「生きた身体」ではなく「反作用し合う身体」を探究するために、格闘技は適しています。私がレスリングをやっていることを話すと、「喧嘩になっても怖くありませんね」などと言われることがあります。逆です。見た目では分からない身体が持つ力の凄さが身に染みると、喧嘩なんて怖くてできなくなります。

ちなみに格闘技にもいろいろありますが、二つの軸、「生+死」「リアルスピリチュアル」で比較してみると面白いと思います。格闘技は基本的に、相手を倒す、身を守るという「生+死」がテーマになっていて、リアルな死をもっとも意識して「生き延びよう」とするのが、クラヴマガ等の軍隊格闘術。一方、死を精神性の次元へ取り込もうとするのが、合気道などの武道。さらに、ルール

で「死」を封印することで格闘を生きた身体として際立たせるのが、レスリングです。特にレスリングは「両肩がマットに着くと負け」ですが、これは「殺さずにコントロールする」ことを象徴しています。「生かす」ことは、古代ギリシアの神々に捧げる競技であったことも関係があるでしょう。また、先の問いに「教養」という言葉が出てきました。教養とは、ジャンルを越境する力だと思のですが、このように格闘技をネタに、違った視点から俯瞰的に考えてみることも、教養の使い方の一つになりうると思います。

**身体性を伴った「生きた知識」とは**

今井 認知科学で使う「身体性」という言葉は、必ずしも「物理的な存在としての身体」を伴うものではありません。私たちは言葉を話す時、特に動きに関係する動詞を使う時に、四肢が動いていなくても脳の運動野や運動の予測を担う前運動野などが活動します。言葉を話すには大脳皮質の側頭葉や前頭葉が大きく関わっています。しかし最近の研究で、生後間もない乳児期における小脳の大きさが、数ヵ月後の語彙の習得数に影響することが報告されています。小脳は運動の学習に深く関わる場所です。私たちの言語は、いろいろなレベルで深く身体に埋め込まれているのです。

私たちが中学生になって英語を学習し始めた時、英語は、日本語と一対一対応であるかのように、外界にでき上がった英語の世界をコピーし

つしか身体の一部になっている。言語も同じで、身につけていくとどこまでも伸び広がって行って、「抽象身体」にまで拡張されていきます。

今井 「前後左右」の方向感覚も、皆さん当たり前の身体的な感覚になっっていると思いますが、これも言語が作り上げた概念です。実は世界には「前後左右」の概念のない言葉がたくさんあるのです。例えば「駅までの道順を教えてください」と尋ねられた時、私たちは「一つ目の角を右に曲がって……」のように記憶を掘り起こして話すと思うのですが、「前後左右」という言葉を持たない人たちは、東西南北といった絶対的な方向感覚と地形に頼って、目的地への行きかたの記憶を作ったり掘り起こしたりします。その仕方はヒト以外の動物のしていることと共有されていて、より「自然」な空間表象の仕方でしょう。

これはたくさん用例を体で覚え、脳が文脈から先読みして判別することで成し得ているからです。これこそが先の「生きた知識」「身体性を伴った知識」です。

ちなみに言葉には、厳密に正しい定義は存在しません。時代や地域の中で、その意味は常に揺らぎ、更新されながら人々に共有されていくものだからです。

**直観を磨くためには「暴走」が必要**

入不二 学びはオープンエンドで、終わりはありません。哲学でもレスリングでもそうですが、学びはどこかで「暴走」が必要です。お話にあったように、子どもは、パッチワーク的なのにうまくいく仕方言葉の世界を学んでいく。そのつど全体が更新される仕方世界を学んで、

う。なので、子どもは「前後左右」という言葉の意味を理解するのにとても苦労するのです。しかし、いったんこれらの言葉を習得し、日常的に使っているうちに、それは完全に身体化され、それなしには「空間の思考」をすることが難しくなるのです。

入不二 哲学の身体感覚も言語に基づいています。哲学は非常に抽象的な言葉も使いますが、うまく進んでいる時は、概念が立体空間を身体的に動くイメージなのです。関係が動いたり変わったり、距離ができたリ逆転したり。それこそ体操選手が空中回転するようなイメージです。その概念体操では、今井さんがおっしゃる「推論」も重要です。子どもが探索する時には失敗がつきものですが、失敗が許されていることが大事です。アメリカの哲学者・バースも

更にその先で抽象身体にまで言語はジャンプします。でも大人になると、学習する場面でも「役に立てばいい」ラインで止めてしまいがちです。しかしそれでは、世界の更新は起こらないし、その先も見ることができない。安全安心第一に身体や頭を使っているだけでは、身体の快楽は分からないし、面白い研究も生まれません。本当の学びは、リミッターを解除したところでやるものでしょう。暴走の先にこそ発見があることは、どんな分野でも同じだろうと思います。

今井 世間では「科学者は分析力に優れ、芸術家は直観力に優れている」と思われているかもしれませんが、科学者にも両方が必要で、特に新しい発見を目指すならば、直観が重要。その直観とは、偶然性に頼るものではなく、豊富な過去の経

アブダクションについて、暫定性・とりあえず性が重要だと言っています。とりあえずうまくいっていることの、幸運と危うさが拮抗する中で、失敗もうまく働くのだと思います。

今井 子どもが言語を学習していく過程は、それこそシステムをゼロから構築していくことです。最初は間違っ言葉を感じたり、考える枠組みとなるスキーマさえ間違ったりするのだけれど、間違いを暫定的に更新しながら、より多くの人と共有できる、より「正しい」と考えられている概念を獲得していきます。

例えば私たちは英語の不定冠詞の「a」と定冠詞の「the」の使い方を、文法として習ったにもかかわらず間違えます。しかし、日本語の助詞、いわゆる「てにをは」は文法として習っていないにもかかわらず。

験から捨象された知識がもたらす「この問題の解決に役立つかもしれない」という、アブダクション推論による閃きなのです。入不二さんがおっしゃる「暴走」とは、まさにこの直観を磨くことと通じるのではないのでしょうか。

私の研究室では、子どもが言語を獲得する過程、学習する過程を研究しているのですが、学生たちが「先生、効率のいい勉強法を教えてください」と言ってくるのです。しかし、私たちが辿り着いた答えはそうじゃないだろうと(笑)。試行錯誤して直観を磨くことこそが大事。学習に効率性を求めるなら、それはコンピュータやAIに到底かないませんから。二十一世紀に求められる新しい知識を創造する力も、直観を磨いた先にあるのだと思います。